



No.5 6

The University of Tokyo Forests News

科学の森ニュース

December 10, 2011

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

瀬戸市と地域交流に関する協定を締結

生態水文学研究所

2011年11月10日(木)、瀬戸市との間における地域交流に関する協定書の調印式が行われました。この協定は、生態水文学研究所赤津研究林における瀬戸市民の利用及び環境整備に関して協議することが望ましいとの考えから締結されたもので、(1) 森林整備に関すること、(2) 自然環境の保護・保全に関すること、(3) 水道水源地の保護に関すること、(4) 市民の環境教育に関すること、(5) 講演、公開講座及びシンポジウムの企画に関することについて相互に協力と支援を行っていくものです。都市近郊に森林を所有する研究所ならではの地域交流を目指していきます。



協定を交わす蔵治所長(左)と増岡瀬戸市長(右)

濱田総長に体験ゼミ「伊豆に学ぶ」の薪割り体験をしていただきました

樹芸研究所

濱田総長による樹芸研究所視察が、2011年8月21日(日)に行われました。総長は、青野研究林でユーカリを記念植樹された後、ふるさと文化財の森に認定されたクスノキ人工林や、現地適応試験を行っているユーカリ人工林などを見学されました。また、教養学部科目・全学体験ゼミナールの中でも人気の高い「伊豆に学ぶ」の各種活動を紹介し、総長にはその一つである「薪割り」を体験していただきました。その後、温泉熱を利用した加納温室を視察いただき、学生教育用教材として栽培・育成中のカカオやバニラなどを紹介しました。



薪割りを体験される濱田総長

宋先生による特別講義の開催

教育研究センター

2011年10月26日(水) 外国人特任教員として2011年6月から11月まで東京大学に在職された宋希強^{ソンシキヤウ}先生の特別講義「内生菌と菌根菌の相互作用に基づくラン植物の保全 - 中国固有種・絶滅危惧種であるセッコク属 *Dendrobium officinale* を例に - 」が行われました。

本講義では、希少で有用な本種のラン植物と菌類を同じフラスコに入れて培養を試みたところ、菌を接種することによってランの発芽と成長が促進されたこと、発芽を促進する菌と成長を促進する菌はそれぞれ異なる種類であったことなど、興味深い研究成果が紹介されました。

在職中、宋先生は演習林所属の大学院生の研究

指導に携わるとともに、全地方演習林を来訪されました。



菌を接種してランを培養する様子を紹介する宋先生

千葉県昆虫談話会から昆虫標本が寄贈されました

千葉演習林

千葉演習林では、千葉県昆虫談話会と協力し3年半に亘り千葉演習林内の昆虫相について調査を進めてきました。この度、その成果が「房総の昆虫 (No.47) 東京大学千葉演習林内昆虫相調査報告」として取りまとめられました。今回の調査では、県内初記録種と考えられる種も含め1,274種が確認されました。2011年11月11日(金) 千葉演習林を特徴づけるような種や、野外でよく見かける普通種を中心とした昆虫標本(331種、474個体)を千葉演習林に寄贈して頂きました。これまで千葉演習林の森林博物資料館に展示していた昆虫標本は長期間の展示で劣化が進んでいたため、この機会に展示替えを行いました。今後も適切な湿度に保つなどの管理を行い、より多くの利用者にご覧頂ければ幸いです。千葉演習林にご来演の際は、ぜひお立ち寄りください。



千葉県昆虫談話会との昆虫標本の引き渡し式

千葉演習林では現在、基盤データ整備の一環として千葉県立中央博物館（以下、中央博）と共同で「フロラ（植物相）調査」を行っています。フロラ調査とは、調査対象範囲内を踏査して確認された種名を記録し、調査範囲のフロラを把握する調査のことを言います。本調査では、千葉演習林全域をカバーするよう1×1kmのメッシュに区切り、全42メッシュの分布図を作成しています。全種の標本を伴うフロラの記録は多くの労力を要しますが、その分、目視のみの調査に比べると格段に学術的価値が高くなります。千葉演習林内は千葉県の中でも最もフロラの豊かな地域のひとつであり、その詳細なフロラに関するデータと標本は貴重な財産となります。

このような大規模な調査が始まった経緯として、かねてから親交のある中央博へ植物標本の同定を依頼したところ、「千葉演習林内のフロラ調査を併せて行い、標本も作製しよう!」と話が進み、分類・同定のスペシャリストである中央博・上席研究員の天野誠さん、尾崎煙雄さん、御巫由紀さんに御協力して頂くことで実現しました。

調査期間は2年間（2010年4月～2012年3月）とし、毎月2日間程度、演習林内の林道や歩道沿いを踏査しています。調査では、中央博の연구원の方々が出現した木本類、草本類、シダ類の種名を同定し、演習林スタッフが花や果実などの特徴の出ている植物について、さく葉標本4点を採集しています。

GPS受信機で調査経路と採集地点の記録、植物の画像データ等も同時に記録しています。千葉演習林としては、中央博の연구원の方々による確実な同定に基づいた調査や標本作製ができ、大変有り難いと考えています。中央博からも、演習林内に現存する房総丘陵の貴重な植物の調査とさく葉標本が得られて嬉しいという意見を頂いています。これまでの調査で何点かの貴重な植物が見つっていますが、今後どんな植物が現れるのかを楽しみに調査を続けていきます。



さく葉採集

演習林のイベントダイジェスト 詳細はホームページをご覧になるか、各演習林にお問い合わせください。

9月	2～5日 体験ゼミ「企画系さらに伊豆に学ぶ」(樹芸)	22日 富良野地区合同ワークショップ 「富良野地方の美しい農山村景観維持のために」(北海道)
	6～9日 体験ゼミ「野生生物の保護管理」(千葉)	25～26日 秋の一般公開(千葉)
	15日 平成23年度全国大学演習林協議会秋季総会	26日 鴨川市共同事業「東大キャンパスツアー」(千葉)
	26～30日 総合科目「伊豆に学ぶプラス」(樹芸)	26日 秋の休日公開(田無)
	27～30日 体験ゼミ「森に学ぶ」(樹芸)	30日 利用者説明会(秩父)
10月	12日 温室特別公開日(樹芸)	12月
	13～14日 第45回北海道地方演習林協議会(北海道)	3～4日 秋の一般公開(千葉)
	15日 サポーター養成講座「森林の公益的機能」(秩父)	4日 野鳥の巣箱を作ろう(樹芸)
	15日 東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」(富士)	4日 秋の休日公開(田無)
	18日 植樹祭(北海道)	10～11日 総合科目「森のエネルギーを使いこなす」(秩父)
	18～20日 平成23年度東海地区農学部附属演習林等技術職員研修(生態水文)	10～11日 総合科目「森をはかる」(富士)
	25日 東京大学基金特別セミナー(秩父)	11日 影森祭(秩父)
	26日 宋希強客員准教授による特別講義	21日 温室特別公開日(樹芸)
	29日 ポータブルウインチモニター作業(富士)	2月
	29～30日 自由見学日、ワサビ沢展示室特別開室(秩父)	3日 森林博物資料館一般公開(千葉)
	30日 「子ども樹木博士」認定会(田無)	4日 東大教職員向け特別ガイド「冬の森林散策(仮)」(富士)
11月	5日 鴨川市交流事業「野鳥の巣箱をかけよう(巣箱作り)」(千葉)	19～23日 総合科目「伊豆に学ぶプラス」(樹芸)
	5～6日 公開講座「ナラ枯れの実態と防除法(講義と野外実習)」(秩父)	20～23日 体験ゼミ「伊豆に学ぶ1」(樹芸)
	10日 瀬戸市との地域交流協定調印式(生態水文)	25～29日 総合科目「伊豆に学ぶプラス」(樹芸)
	10～11日 平成23年度技術職員等試験研究・研修会議(生態水文)	25～29日 体験ゼミ「伊豆に学ぶ2」(樹芸)
	12日 サポーター養成講座「秩父演習林と秩父地方の歴史」(秩父)	25～27日 体験ゼミ「ダムと土砂と海」(生態水文)
	14～16日 業務運営・組織検討委員会機械グループチェーンソー研修(秩父)	29日～3月2日 体験ゼミ「雪の森林に学ぶ～北海道演習林」(北海道)
	19～20日 総合科目「森のエネルギーを使いこなす」(富士)	3月
	22日 現地検討会「上富良野町のエコツーリズム・グリーンツーリズム・アグロツーリズム」(北海道)	8～13日 体験ゼミ「企画系さらに伊豆に学ぶ」(樹芸)

凡例・・・無印:一般向け :学生向け :その他

ニホンツキノワグマ

食肉目 クマ科

学名： *Ursus thibetanus japonicus* (Schlegel, 1857)

主に本州の山間部に生息している大型ほ乳類です。成獣は頭胴長 120～160cm、体重 55～180kg になります。体色は基本的に黒褐色で、胸に白いV字斑を持っています。

埼玉県では主に秩父地方での目撃情報が寄せられており、秩父演習林でも年に数度、目撃されています。演習林内では、樹上でドングリやクリなどを食べた際に折った枝をおしりの下に敷くことによって作った「クマ棚」、樹木の皮を剥がした「クマハギ」やクマに襲われたと見られるハチの巣跡などのフィールドサインを観察することができます。

秩父演習林



自動撮影カメラでとらえたツキノワグマ

名所・名物案内

はげ山の森林再生工事跡を巡る

生態水文学研究所

明治時代初期の犬山地方の山林は、過度の森林利用により荒廃していました。その状況は、谷筋の一部に樹木が残る程度で山腹や尾根部は植物がほとんどない“はげ山”であったといえます。犬山研究林では、1922年に設置された当初から、はげ山を森林に再生するために様々な工事が行われました。工事の数は1924年から1963年までの約40年間だけで569箇所、クロマツやヤシャブシ類などの植栽は122万本にものぼりました。

初期の工事から約90年が経過した現在、犬山研究林は全面が森林に覆われました。当初の役割を終えた工作物は土砂や木々に埋もれ、よく注意して見ないとその歴史をうかがい知ることが難しくなりつつあります。そこで、こうした貴重な工事跡を教育活動に活かす目的で、2010年にはげ山の森林再生工事跡を巡る見学コースを整備しました。勾配をゆるくして土砂の安定をはかる土壇堤工、鉄



土壇堤工に設けられた鉄線蛇籠製の放水路（1930年設置）

線蛇籠やコンクリートからなる放水路、谷筋の流水や土砂を安定させる谷止工、川岸を安定させる流路工など、様々な工事跡を1時間程度で巡ることができます。これらの工事についてはリーフレット「はげ山が森に戻るまで - 東京大学犬山研究林の砂防・緑化のあゆみ -」で詳しく解説しています。“はげ山”だったころの犬山研究林に思いをはせながら、はげ山を森林に再生した歴史を学ぶことができます。

科学の森ニュース (The University of Tokyo Forests News)

第56号 (No.56)

発行日 平成23年12月10日

発行人 白石則彦

編集人 後藤 晋

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林広報情報委員会

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

E-mail mori2010@uf.a.u-tokyo.ac.jp